

六花

り
つ
か

月刊俳句雑誌

2007 15th anniversary

Rikka haikukai rockoh yamada

cover designed by masumi

1月号

貫 かん



山田六甲

湖に羽ばたき始む初日の出

餅花 もちばな を貫 つら きぬたる枝の先

裏白を背負へる人の深き辞儀 じぎ

裏白を踏んで裏白採 と りにけり

餅花の柳を切るや顔を打たせ

元日や池の底から泡ひとつ

元旦や父ぶんちよう鳥とりのよわい齡い来て

三さん宝ぼうを吊り上ぐ如し裏白は

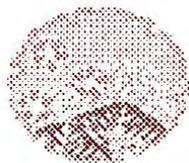
元旦の水覚ましけり鴨の声

初はつ凧なぎやあまたの鳥はみお漣い引いて

初凧や自由自在に鴨の漣

おもしろしのまためでたしやお元日

餅はだの張りつめゐたる鏡餅



蝶は鷗かもめに畑は海に麦の秋
軽かる鴨がもの水みず搔かきの爪つめ鈍にぶ青あおき
蜻蛉とんぼの貌かおが光りて見えぬなり
やいとばな背中に乗せて猫もどる
滝壺に男を押ししてきたところ
滝川は魚の影が綺きれ麗いなり
手花火に触れもせず夏ゆ逝いきにけり
鷺草さぎそうの月に向かひてひらきをり
風鈴をためらひつつも外はずしけり
葛くずの丘登りて海の風に立つ

長き夜

貝森 光洋 (光大改め)

修^{しゅう}礼^{れい}の如^{ごと}く始^{はじめ}まる長^{なが}き夜^よ
 爽^{さわ}やかに腕^{わん}白^{ぱく}相^{さう}撲^{ぼく}の勝^{かち}ち名^な乗^り
 馬^ま肥^ええてみちのくぶりの貌^{かお}となる
 寅^{とら}さんと蓑^{みの}虫^{むし}呼^よんでみたくなる
 夕^{ゆふ}芒^{すすき}見^みている吾^{われ}も暮^くれており

太公望

梶浦玲良子

今^{いま}頃^{ころ}に夏^{なつ}の疲^{つか}れが五^ご七^{しち}五^ご
 鉢^{はち}巻^{まき}の舟^{ふね}の出^いてゆく青^{あお}みか
 みづうみに斜面^{せんめん}の記^き憶^{おく}うめもどき
 かなかなや回^{わい}文^{ぶん}なりしホテ^{ホテ}ルの名^な
 銀^{ぎん}河^がからこぼれ落^おちたる太^{たい}公^{こう}望^{ぼう}

秋高し

木内美保子

鍬洗ふ秋の入日に背を焼いて
 秋高し天守の上を鳶の舞ふ
 さい銭の音からからと神の留守
 束ね持つたいまつの如曼珠沙華
 草刈ればおんぶばつたに飛びつかる

バスを待つ

笹村 政子

銀杏ぎんなんを拾ひ捨てしてバスを待つ
 秋天をほしいままなり鳶の笛
 水音に白萩の散りそめにけり
 古井戸の土の匂ひや秋の蜂
 パン種を寝かせてをりぬ敗戦日

曆こよみ

水谷ひさ江

来年の福を探しに年の暮
しにく猪肉といひてやみじる闇汁すすめらる
ふるにつき古日記閉ぢる可もなし不可もなし
 長年の位置替へてみししんごよみ新曆
 せせらぎの音のみ聞こえてりもみじ照紅葉



雪樹集

木もくせい犀い

K O K I A

木犀の花の乾かわきてこぼれざる
庭咲きを母へ供へる杜鵑ほととぎす草
帰り来し白粉おしろい花ばなの咲き頃ごとろに
秋風や重なり合へる絵馬の音
秋蝶の川面かわもを摩すつて飛びにけり

柴折戸しおりのど

松本文一郎

柴折戸を繕つくろうてをり夏の果はて
門灯の笠に守宮やもりの身じろがず
秋立つや虫歯治療の音の中
空蝉うつせみの葉に付けるまま掃はかれけり
公園に影落しけり秋灯あきともし

案山子かかし

岩松 八重

朝顔のしたたる青を咲かせけり
秋祭り三百年の鐘かねをつく
ページ繰りつまみ食ひして夜長なる
秋の夜の尺八しゃくばちに酔よひぬたりけり
まだお前生きてゐたのか案山子君

もみぢ葉を握りしめ泣く赤子かな わかやぎすずめ

赤子の手を例えて、紅葉のような手という。その赤子が紅葉を握りしめて泣いている。母親の背中から手をのばして紅葉を掴んだのであろうか、それとも他の原因で紅葉を手にしたのだらうか、どうして泣いているのだらうかなど想像が広がる。

大木に熟してをりぬ榎の実 筒井八重子

榎は大木になるが、実は南天よりやや小さく、熟すと黄色から赤くなる。その実は甘いけれど幾分か渋みがある。大木にしては目立たず小さな実ではあるが美しい。

朝顔を水盤に生け喜ばる 延川 笙子

今年の秋、笙子さん宅で朝顔を水盤に生けてあるのを見た。笙子さんは句会場を提供して下さる延川五十昭さんの奥さまで、句会のたびに季節の花でもてなしてくださるのだ。お宅に伺ったら私はまず、さりげなく生けてある花に挨拶をするよう心がけている。

門前に莫蔭持つ父や運動会 永田 勇

まだ登校時間で父兄は運動会場に入れなので、校門の

前で父親が莫蔭を持って立っている。普段は仕事中心の父親が不義理を理めるかのように、少しでも良い席を確保しようとする姿が、子供には気恥ずかしくも嬉しい。客観的でありながら、親の情をうまく詠みこんだ。

手際よく仕切る長老里祭 山本ミツ子

祭りの華は若者のエネルギーだが、一切のまとめはやはり長老の力がものをいう。若い者は足元にも及ばない長老の長年培った仕切りと智恵にほればれだ。祭は老人と若者の交流の場であり伝統継承の場でもある。

義仲寺や義仲芭蕉の墓も菊 松本 蓉子

義仲寺は天津にあり芭蕉の墓もあることで有名。木曾義仲の「動」と松尾芭蕉の「静」の対照的な人生を歩んだ二人ではあるが、今は静かに眠っている。その二人の墓に共に菊の花が手向けてあつたというのだ。

伊吹山頂霧の中より人現る 中瀬 定子

元禄二年の秋、松尾芭蕉は、「奥の細道」の旅を、伊吹山のおもと大垣で終え、伊吹山については「そのままよ月もたのまし伊吹山」と詠んだ句を残している。私が北陸に旅をするときには、伊吹のなだらかで大らかな姿にほればれしながら車を飛ばす。その山頂の霧の中から人が現れた。山頂には日本武尊像が立っているから、もしかしたらその幻影をみたのかも。

六花集

山田六甲選

わかやぎすずめ

虫の夜ひとり外へと出でにけり

夜長かな子鹿の声を思ひ出す

もみぢ葉を握りしめ泣く赤子かな

秋風を受けて夜空を仰ぎたる

秋風や親しき友が訪うて来し

筒井八重子

大木に熟してをりぬ榎の実

笑ひ声近づき来たり秋の暮

畦道の轍わだちに倒れ曼珠沙華まんじゅしゃげ

目の中を駈け抜けて行く曼珠沙華

秋草を絵手紙にして知らせけり